

メ ル ー 峰

岡 田 康 (鱧鱒同人)

二人の負傷者を出して最悪の幕切れとなった2004年、あれから2年の月日が流れ今また同じ場所に立っている。

あれから2年、少しでもクライマーとして成長できたのだろうか。自問自答してみても答えは返ってこない。きっとその答えはあのシャークスフィンに取り付いたときに分かるに違いない。

今回は絶対に登る。みんなそんな思いの中旅立った。

旅の行程は、2年前と全く同じリズムで進んでいく。デリーで煩わしい荷物の通関を済ませ、灼熱のデリーを慌しく脱出する。バスはインドの喧騒の中をひたすら目的地を目指して走る。登山口のガンゴドリに着くと体を慣らすためにボルダリングを楽しむ。これも2年前と同じ、触る岩も課題内容も何も変わらない。全てはあの時のままだ。

登山口からはBCに向けていよいよキャラバンが始まった。日本の北アルプス、剣沢にでも行くように皆、通り慣れた道を思い思いのペースで歩く。ここで慌ててはいけない。メルーへの道はもう始まっているのだ。じっくり高所順応をしながらBCを目指す。

8月31日、BCとなるタポバン(標高 4,200m)に到着。何も変わらない風景に心が安らぐ。これから1ヶ月半、登山のことだけを考えればよい生活が始まった。

BCについて二日後、早速行動開始。まずは各自のペースで高所順応を始める。それに合わせて

旗印をモレーンに立てていく。通り慣れた道とは言え、今回は負傷者を降ろす際に吹雪に逢い、道に迷った経験もある。視界に入り易いように慎重に立てる。しかしこの石を積む作業も順応できていない体にはひと苦勞だった。

長いアプローチをこなしABC(標高 4,850m)に到着。ABCから見えるメルー峰は前回よりも雪が多いように見える。ひと安心だ。今回は雪壁部分に氷が出ていて、日射とともに氷に食い込んだ石が落石となって降り続けたという経緯があるからだ。雪が多いことはこちらとしては大歓迎なのである。

数日後、ABCを設営しハイポーターひとりと我々が荷物を上げ始める。一応、順応は済ませたとは言え、ザックを担いでのABCまでの道のりはきつい。息を切らさないように何度も何度も立ち止まりながらゆっくりと歩く。

ABCを設営し、明日からいよいよC1に向けてフィックス工作に入ろうかと言う晩、突然、岡田が体調を崩す。まだ順応ができていないのだろうか。腹部の調子が悪い。

翌日、フィックス工作を3人に任せ、一人下山。下山後、体調が回復し戻ると次は花谷が体調不良で下山。その次は黒田。みんな示し合わせたように順番に体調を崩していく。結局最後まで元気だったのは馬目一人である。何度も通ったインド遠征の賜物なのか、それともただ単にこの男が強いだけなのか分からないが、やはり隊長が元気だと緊張感があり、皆、すぐに体調を回復させては戻

ってくる。ここで遅れをとるわけにはいかないからだろう。言葉には出ないが思いは同じである。

C1での順応を済ませ、アタックの日を迎えた。約10日間、ここには戻っては来れないだろう。

C1からはロープ5本分をフィックスしてその後、そのままアルパインスタイルで登る予定である。荷物は軽量化をはかり、食料はチョコバーとコーンフレーク、クライミングギアは最小限にとどめ、クライミングシューズはチームでひとつだ。また今回は岩壁部分でのビバークを想定してテントではなくハンモックを用意した。長い旅がこれから始まるのだ。その晩はABCで考える最大の豪華な食事で明日に備えた。

翌日、朝ゆっくりと目を覚まし、午後雪壁部分が日陰になるのを待って出発。シュラフ、食料、クライミングギアを背負ってのユマーリングに四苦八苦しながらもC1に到着。いよいよ明日から作業開始である。

花谷、黒田ペアでフィックス作業を開始。前回のボルトを頼りにフィックスを張って行く。途中、雪面に日が当たったところで、一時中断。日陰になるまでの間、「人名しりとり」なるものを始める。のん気なものである。雪崩が横を通るのを見ながら皆必死に人名を思い浮かべる。どこまでも陽気でいつでも登山を楽しんでいる姿は本当に見ていると気持ちが良い。日陰になると同時に「人名しりとり」は中断。ここからさらに氷壁を2P登りフィックス作業終了。

アタックを明日に備えていたが、夜半頃から雪が降り始めた。最悪のタイミングである。ここまで晴天続きだったのが嘘のようだ。

翌日早朝起床するも全員一致で一日延期。再び目を閉じると雪崩の音が谷に響き始める。きっとシャークスフィンまでのアプローチは雪崩の巣と

化しているだろう。

少し日程をずらすだけのつもりでいたが、これ以降全く雪が止む心配がない。悪天の周期に捕まったのだ。シャークスフィンをアルパインスタイルで目指す我々には余分な食料、燃料がほとんどない。フィンのためにも停滞で普段通りの食料を食べる事は許されない。少しずつ食料を分けて食い延ばす方法をとった。チョコバーを朝二本、昼二本、夜二本。または夜にコーンフレークとミルク。それが5日間。今考えてもうんざりするような食生活だ。停滞で体力を温存するどころか体には疲労が蓄積されていったことは間違いないだろう。しかし、ありがたいことに我々にはこんな境遇をも楽しむ能力が備わっていた。5日間、手を変え品を変えトランプ、「人名しりとり」に興じる日々。どうしようもない逆境を笑い声の絶えない生活に変える。ある種アルパインクライマーのすばらしい素質とも言えるかもしれない。

閉じ込められて4日目、今後の予定について話し合う。このままシャークスフィンに行くのかそれともルート変更をするのか。もうすでにシャークスフィンの食料や燃料にも手を付け始めていた。この疲弊しきった体とわずかな燃料と食料でシャークスフィンに取り付くことは自殺行為に近いだろう。多少の論議はあったものの結局、一度下山して再度ルートを検討する事にした。

5日目、風は強いが天候は悪くない。朝日と同時にテントの窓を開いて向かいのシブリンに目をやると、西陵に人影が見える。明らかに登山者だ。数日の悪天の中、少しずつ行動していたのだろう。西陵上部セラックの基部にもう辿りついているのではないか。よく悪天の中、ここまで行動したものだ。この時間帯にセラックを歩いているのなら間違いなく頂上に達するだろう。

4. 海外登山記録

そんな彼らの様子を花谷が横で見ながら一言つぶやいた。「ええな、俺も頂上行きたいな」。みんなの気持ちを代弁するような一言だった。全員気持ちは同じだ。ここで馬目からひとつの提案が出る。このまま降りるかそれともこの好天の周期をつかまえて頂上を目指すかだ。理由はいくつかあるが、このまま降りて体調の回復を待って再度アタックとなるとまた多くの日数を費やす事になる。そこで悪天の周期につかまればもう目も当てられない。せっかくのこの好天の周期を掴まない手はないだろう。山と天気、我々の疲労度を考えると当初の予定であったシャークスフィンの完登は難しい。行きたいと言う願いだけで無理してシャークスフィンへ行くのは現時点では無理と判断し、ババノフが登ったロシアルートへ変更を決めた。

翌日、早速シャークスフィンへのフィックスを回収し次の登攀に備えた。いよいよ明日、我々のクライミングが始まるのだ。しかし夜眠り始めるが、明日のことを考えると眠れない。気分が高揚しているのだろうか。静かに目を閉じて夜が明けるのを待った。

2時起床、準備を済ませ真っ暗な中、懸垂下降で雪面に下りる。そこから右手のリッジを目指して登り始める。リードは軽めのホールバッグで登りフィックス、その後フォローが荷物を担ぎユマーリング。これを3Pから4P繰り返して交代するシステムをとった。

最初は順調であったが、ライン取りにミスがあったことや、降雪後なのでフィックス工作には時間を費やした。夕方、日も傾き始めるころようやく右手のリッジへ上がる岩壁基部に達した。壁の弱点は概ねみんなの意見が一致したのでラインを決定したが、容易ではないことは確かだ。でもここを登るしかないだろう。

黒田が登り始める。岩のバンドを右手にトラバース。浮いた岩に注意しながらの登攀は精神的にきつい。ビレイ解除のコールでほっと一息つくが、次のピッチがまた厄介だ。夕暮れが近づく中、再び黒田が登り始める。岩や落氷がビレイ点をかすめるように落ちて行く。「落ちないでくれ」そんな気持ちが胸をよぎる。日がどっぴりと沈み、ヘッドランプなしでは動けなく頃、ようやく黒田のリードは終わった。ユマールをしながら黒田のラインを辿る。悪戦苦闘のラインは間違いなく今日の核心であった。ナイスクライミング。

そこからさらに馬目が一ピッチ伸ばし、今日のビバークサイトを設営する。急な雪の斜面をカッティングしてハンモックを吊るし午前0時、眠りに着く。狭苦しいハンモックは圧迫感もあったが意外とぐっすり眠る事ができた。

翌朝、4時起床。味気ないチョコバーで朝食を済ませ、今日のクライミングへ出かける。ここからはハンモックもシュラフも置いていく。ビバーク用具はハンモックのフライがふたつとガスがひとつ、そしてお決まりのチョコバーだ。

もしかしたら頂上往復で帰って来ることができないのではないかと、淡い期待を胸に登り始める。20メートルのトラバースで目的のリッジに出た。リッジ上からは稜線が良く見える。今日は順調に行けそうだ。そう思って岡田がリッジに登り始めるが、花崗岩の上にはうっすらと積もった雪はさらさらで岩と馴染んでいない。馬目と交代し、先を登ってもらう。馬目がロープを二本連結し100m伸ばしてアイススクリュールでフィックス。その後も昨日同様、不安定な雪に悩まされる。さらに馬目が100mロープを伸ばして雪のボラードにてフィックス。このままこのガリーを詰めても時間だけがいたずらに過ぎていきそうだ。予定を変更し

てここから右手のガリーに入る。花谷がリードを始めるとすぐにこちらに笑顔を振りまいた。氷壁に変わったのだ。これでスクリュウが使える。花谷は勢いよくロープを伸ばして行く。快調にロープを伸ばし岡田と交代。いよいよ稜線は近づいてきた。もう4Pも伸ばせば稜線に出られるような気がした。しかしいくらロープを伸ばしても稜線はまだ先にある。メルーの壁は大きくやはりそう簡単には登らせてくれない。そうこうする内に急激に天気が変わり始め雪がちらつき始める。最初は軽めのスノーシャワーもいつしか雪崩と形容したくなるような規模に変わり始めた。このまま降り続けばどうなるのかは考えるまでもない。

次は馬目が登り始める。日は傾き今日も残業を余儀なくされることは確実だ。急な氷壁を登り、核心部のミックス帯を登る頃には真暗闇となった。それでも馬目はヘッドランプで順調にロープを伸ばして行く。ようやく稜線直下の雪庇に着き、ここを今晚のビバークサイトとする。ザックに腰を下ろし、温かな飲み物とお決まりのチョコバーを口に入れて就寝。ザックに腰を下ろし背中合わせの格好ではほとんど眠る事ができず、まるまって横になる。座っているよりは幾分ましだが、やはり寒さで眠れない。眠る事ができたのはほんの30分ほどだろう。後はひたすら起床時刻を待った。

翌朝3時起床、温かな飲みものを作り、身支度を整え頂上を目指す。目指す頂上はビバークサイトからも良く見えた。まぎれもなくあれが頂上だ。馬目・花谷と黒田・岡田のペアで頂上を目指す。稜線へぬけると風が非常に冷たい、冬用オーバー

の下にダウンジャケットを着ても一向に体温は上がらない。何度も何度も立ち止まりながら、まずは花谷・馬目ペアが頂上を踏む。続いて黒田・岡田ペアが頂上へ。お互い抱き合い、握手をしながら喜びを分かち合った。記念撮影を済ませ、周囲の景色を充分目に焼き付けて下山開始。昨晚のビバークサイトで一息入れて同ルートを下降。下降ポイントには登攀中に下降用のアバラコフを作っていたのでそれを支点に懸垂で降りた。同ルートとは言えアバラコフの支点を見つけることができない箇所もあり、この日もヘッドランプでの行動を余儀なくされ、21時ようやくC1に辿り着いた。

温かなものを飲みながら登った喜びを分かち合う。みな疲れてはいるが笑みは耐えない。登ったと言う実感が始めてここで沸いて来る。

翌日、ゆっくり目を覚まし午後以降までゆっくり過ごす。昨日登った余韻に浸りながら会話はいつしか今回のクライミングの反省会に変わり始めた。それぞれのクライミングや装備について反省点、改良点について話し合う。失敗から得るものも大きい、成功から得るものはその比ではないだろう。今回のクライミングで得た経験をみんなに分かち合い、そしてこれを踏み台にしてさらに次の山に還元したい。そんな気持ちがひしひしと伝わってくる話し合いだった。

メルー峰は僕たちにとって目標ではあっても終着点ではない。この登攀をステップにして誰もが次の山を見ているのだ。僕たちのクライミングはきっとまだまだ続く。この世界中に山がある限り。